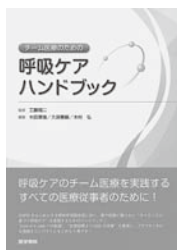


## 書評

[評者]

貫和敏博

東北大学教授・呼吸器病態学/  
日本呼吸器学会理事長



## チーム医療のための 呼吸ケアハンドブック

工藤翔二 監修

木田厚瑞, 久保恵嗣, 木村 弘 編

A5判 頁312 2009年

定価 4,410 円(本体 4,200 円+税 5%)

[ISBN978-4-260-00793-1] 医学書院刊

「呼吸ケア」という言葉が取り上げられてすでに10年以上が経過するが、この度「チーム医療のための」という読者対象と、日常臨床ですぐ参照しようという意味の「ハンドブック」の体裁をなす本書が上梓された。

呼吸ケアという医療は、現代社会、ことにタバコが税収維持のための課税対象品という時代錯誤的状况が改善されない中で、呼吸器関連医療スタッフが正面から向き合う必要性のある領域である。肺はゲノム(遺伝的)背景、環境、習慣の上に種々の病態が形成され、加えて加齢に伴い進行する。高齢化社会日本で今後数十年間、呼吸ケアが重要な課題になることは、工藤翔二氏による序論にもある通り、重く受け止める必要がある。

呼吸ケアには日常動作における苦渋への対応も含まれる。かつてCOPDで加療中に肺癌併発を告げられた患者が、「肺癌とはチョロイものですな」と述べたのを耳にしたことがある。死への病としての癌よりも、刻々の動作に伴う苦悩がいかに患者を追い込んでいるか、想像に余りある。

本書はチーム医療という観点から、木田厚瑞氏の総論中で医療サービス、慢性疾患、高齢者、医療費、在宅ケアなどについてオーバービューが与えられており斬新である。チーム医療はその全体像を理解して初め

て各パートに力を注ぐことが可能となる。引き続き、アセスメント、薬物療法、運動療法、栄養療法、禁煙教育が、まず呼吸ケア医療の基本として提示される。その後に、在宅酸素療法、在宅人工呼吸療法、気管切開ケア、さらには関連するSAS、また長期ケアの大きな課題となる感染症がそれぞれ経験豊富な執筆陣により要領よくまとめられている。最後には疾患別呼吸ケアの応用と注意点として気管支喘息以下10疾患が各論としてまとめられている。

何よりも日常生活に苦渋する患者に接する医療チームが必要とするものは患者心理の理解、またCOPDなどの進行が緩徐ながらも終末期における医療倫理の理解である。この2つの課題には2章、20ページが割り当てられ、本ハンドブックの最大の特徴となるのでないか。引用文献も新しいもので、現在の課題に対して理解が深まる。

折しも「慢性呼吸器疾患看護」認定看護師が2010年2月に日本看護協会より制定され、スクリーニングが始まろうとしている。また平成22年度診療報酬改定において人工呼吸器管理が呼吸ケアチーム加算として算定されるというニュースも耳新しい。本ハンドブックはそうした中でまさに時宜を得たものであり、呼吸器科医、看護師、コメディカル各位に広く現場で参照されることが期待される。